

社会的事象を多面的・多角的に考察することができる生徒の育成

教育実践研究科 教育実践専攻 教職実践基礎領域
服部 隼大

I はじめに

連携協力校である名古屋市立A中学校において、約1年半のサポーター活動と教師力向上実習Ⅰ・Ⅱをさせていただいた。教科指導や学級経営、生徒指導、部活動指導、行事の運営などについて、実践的に学ぶことができた。

本稿では「授業づくり」に焦点を当て、「多面的・多角的に考察することができる生徒の育成」をテーマとして、教師力向上実習Ⅰ・Ⅱにおいて取り組んだ成果を報告する。

II 研究主題設定の理由

1 今日の教育課題

現代の社会では、環境問題、少子高齢化、グローバル化などの様々な問題や変化が進行しており、その多様化・複雑化・長期化が深刻になってきている。一方こうした問題を争点に行われる選挙への投票率は低く、特にこれからの社会を作っていく若者の政治的無関心が問題視されている。そんな中、学校教育には「生きる力」や「21世紀型学力」などの新しい学力観が取れ入れられ、複雑な社会に適応し、主体的に関わることができる人の育成が進められようとしている。これは中央教育審議会の「第2期教育振興基本計画の策定について(諮問)」(2013)において「社会がどのように変化しようとも、自ら考え行動し他者と協働しつつ新たな価値を生み出す、真の『生きる力』の育成が社会の構成員一人一人に、また社会全体において求められる。」と記述されていることから読み取れる。これらの多様な問題にあふれている社会に適応し、生きていくことができる子どもを育てることにおいて、社会科が担う役割は大きい。

2 学習指導要領から

前述した多様で深刻な問題が多い社会に適応するため、生徒にどのような能力を育むべきなのかは、2008年に告示された学習指導要領における社会科の内容の改定から読み取ることができる。

2008年の改定は、教育基本法の改正や学校教育法への対応と、PISA調査に代表される世界標準の学力への注目によって「思考力・判断力・表現力」の育成の重視を中心に行われた。社会科で求められる「思考力・判断力・表現力」とは「様々な資

料を適切に収集し、活用して事象を多面的・多角的に考察し公正に判断するとともに、適切に表現する能力と態度」である。これは以前から社会科において創意工夫の元で実践されていたが、今回の改訂ではそれをより一層重視するという方針を取っている。一方で、知識として定着させるべき内容が格段に増え、知識を基に思考したり判断したりする力を育成することも求められている。

3 生徒の実態

知識として覚えるべきことが増えたということもあり、生徒の社会科に対する考え方も「暗記する教科」という認識がいまだに強い。特に歴史においてはその傾向が顕著に現れている。

4月にA中学校2年生(96名)にアンケートを実施し「歴史が好きか嫌いか」と問い、理由を記述させた。好きと答えた生徒は全体の30%であった。その理由の主なもの、「理科と違って流れて覚えることができるから」や、「覚えることが得意だから」などで、好きを選んだ生徒のうち70%が「暗記が得意だから」などの理由だった。逆に嫌いと答えた生徒のうち、95%の生徒が「暗記が苦手だから」などの理由を挙げた。生徒の社会科に対する「暗記教科」という認識の強さが「社会科嫌い」をつくる原因となっていることがうかがえる。

また、授業の様子を観察すると、一問一答式の明確な答えがある質問に対して、進んで発言しようとする生徒が多い。一方、自分の考えなどいくつも答えが考えられる内容について説明を求められる場面では、発言する生徒はほとんどいない。また、ワークシートに自分の考えを書いていたとしても、板書されたことを正解として、自分の考えを消して書き直す姿や、板書されるまで記述せずにいる姿も見られる。

4 目指す生徒像

社会的事象に対する解釈には、確たる「正解」というものは存在しない。社会は人の行いで作られていくものであるため、立場や視点が違えば見方や、理解の仕方が違ってくる。正解か不正解かではなく、様々な立場から考え、その上で自分はこの立場の考えを重視するという意見を持つことが大切である。

そこで、目指す生徒像を以下のように設定した。
社会的事象を多面的・多角的に考察することができる生徒

III 研究の構想

1 多面的・多角的な思考とは

中学校学習指導要領解説社会科編では、「『多面的・多角的』の『多面的』とは学習対象として社会的事象が様々な面をもっていることを、『多角的』とはそうした社会的事象を様々な角度から考察し理解することを意味している。」と定義しており、さらに、「これらを相互に関連付けることによって、社会科の特質であり基本的なねらいである能力や態度を育成することができるのである。」と述べている。

「多面的・多角的」について、歴史的分野からアプローチを行った先行研究として山川(2004)を挙げる。山川は、「多面的とは、歴史的な事象を、政治的・経済的・社会的・文化的といった様々な側面(多面性)から見て、捉えることであり、多角的とは歴史的な事象を異なった立場から見る(多角的)ことである。」と定義している。

「鎖国」を例に説明する。多面的思考とは「キリスト教の広まりを防ぎ、幕府中心の政治を進めるために行われた」という政治的側面と、「貿易を長崎の出島に制限することで、貿易による利益を幕府が独占した」という経済的側面などの、複数の側面で捉えることである。

また、多角的思考とは、「『鎖国』は為政者の立場ではこういう意図があり、被為政者の立場には、こういう影響がある」などといったように異なる立場から考えることである。

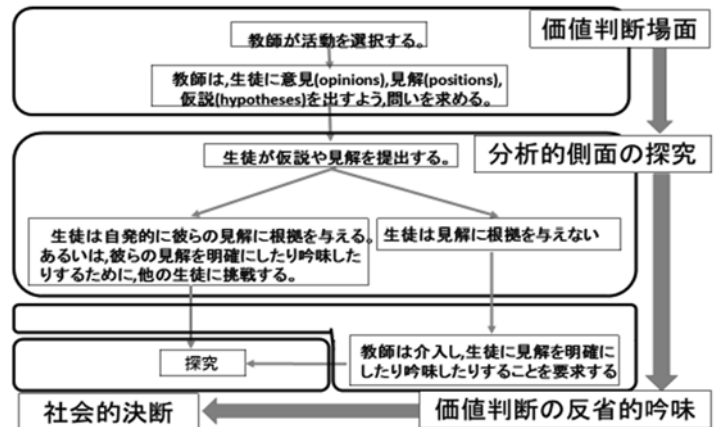
本実践では、この多面的な思考と多角的な思考をそれぞれ別のもので分けて考えるのではなく、二つを相互に関連させ、同時に育成するものとして捉える。

2 先行研究

多面的・多角的な思考力を育てる先行研究として小原(1990)を挙げる。小原は、次のような流れで授業を行っている。まず、社会的論争問題を学習課題として挙げる。二者択一の選択肢を用意し、生徒にそのどちらかを選ばせる「価値判断場面」を授業の中に設定する。そして、「価値判断場面」における判断に対して、自分なりの理由を考える「分析的側面の探究」、他の立場の意見を聞く中で自分の意見を考え直し、より根拠の明確な説得力のある理由へと昇華する「価値判断の反省的吟味」へと進む。そして意見を交流し、お互いの意見に対し補充、反論し合う中で二つの選択

肢の良いところを合わせた代案や折衷案などを創出し合意形成を図る「社会的決断」に至る。

この「価値判断場面」「分析的側面の探究」「価値判断の反省的吟味」「社会的決断」の授業の流れを以下の図①にまとめている。(筆者加筆)



【図①】小原の価値判断場面を取り入れた実践の流れ

小原による実践の良さをまとめる。まず、「価値判断場面」と「分析的側面の探究」では、二つの選択肢から生徒が自らの考えを選ぶことによって課題に対する主体意識が高まる。また、立場の対立がはっきりするため、論点を整理しやすく、自分の立場の根拠となる考えを持ちやすくなる。

「価値判断の反省的吟味」や「社会的決断」では、自分の立場と反対の立場の意見を比べ、より根拠を補充していく中で、相互のメリット・デメリットを明確にすることができる。その上で、自分の最終的な意見を、これまで集積してきた根拠を基に述べるものが求められる。小原によるこの一連の学習の流れにより、多面的・多角的な思考を育むことができる。

しかし、社会的論争問題を取り上げ、授業の中に「価値判断場面」を構成するという性質上、社会科の中でも公民的分野に比べ、地理的分野や歴史的分野では取り入れにくい。そこで、本実践では、地理的分野や歴史的分野においても「価値判断場面」を設定することをを行い、生徒の多面的・多角的な思考能力を育てることを目指した。

3 研究の方法・手立て

手立て① 価値判断を求める学習課題の提示

歴史的分野や地理的分野で価値判断場面を設定する際、学習課題が大切であると考えた。価値判断を求める学習課題とは、二者択一の選択肢が同時には選択できない、どちらも大切であるが、どちらかを選ぶともう片方はないがしろにされてしまうといったような対立がある課題である。このような課題を提示することで、生徒はどちらを選

ぶにせよ、他の意見よりも説得力のある理由を示す必要が生じる。さらに、互いの意見を交流することで、相手側の意見に対して認められる部分や自分の意見の弱い部分などが明確化され、根拠のある意見へと自分の意見を補強していくことになる。このような学習活動を展開するために、価値判断場面を求める学習課題を設定する際のポイントを以下の三点にまとめた。

- ポイント① 解決すべき切実性のある課題であること
- ポイント② どちらの考えも正当性があること
- ポイント③ 意外性、新たな事実の発見があること

ポイント①は、生徒に「考える必要がある」と思わせるような課題である。つまり、自分たちにとっても関わりのあることであり、それを解決しないといけないと思わせるような課題であるということが重要である。

ポイント②では、価値判断場面とする二つの対立している立場について、どちらの意見にも正当性のある課題であることが大切である。片方にしか正当性のない問題はそもそも対立せず相手の立場を否定するだけで思考が終わってしまう。そうではなく、どちらの言い分にも正当性があり、生徒が葛藤する課題であることが重要である。

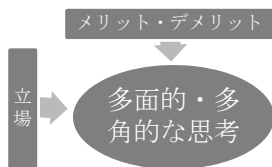
ポイント③として、生徒の固定概念を崩せるような意外性のある題材であることが好ましい。そうすることで、生徒はこれまでの知識や経験から形成されている認識を崩され、新たにその問題に向きあう。そのため、葛藤したり、自分とは違う他の意見に対しても耳を傾けたりしやすい。

以上の3点に留意して価値判断場面を設定し、実践を行った。

- 手立て② 立場、メリット・デメリットを意識させる資料の提示

「多面的・多角的な思考」を目指すときに、二つの方向からのアプローチができるようになる。一つは「立場」で、もう一つは「メリット・デメリット」の考え方である。(図②)

社会的事象を理解する上で立場の違いによって捉え方も変わってくるという視点をもつことは大切である。特に、歴史的分野は「勝者の歴史」といわれるように、



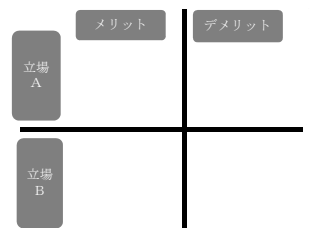
【図②】二方向からのアプローチ

力のある側の意見や主張が正義のように語られ、史料などが残されていく側面がある。そのため、どうしても勝者側からの目線のものを中心として「史実」が形作られているという特性がある。そこで、その一方の立場からのみの思考ではなく、

他の立場からも考えるという姿勢が多角的な思考に必要である。

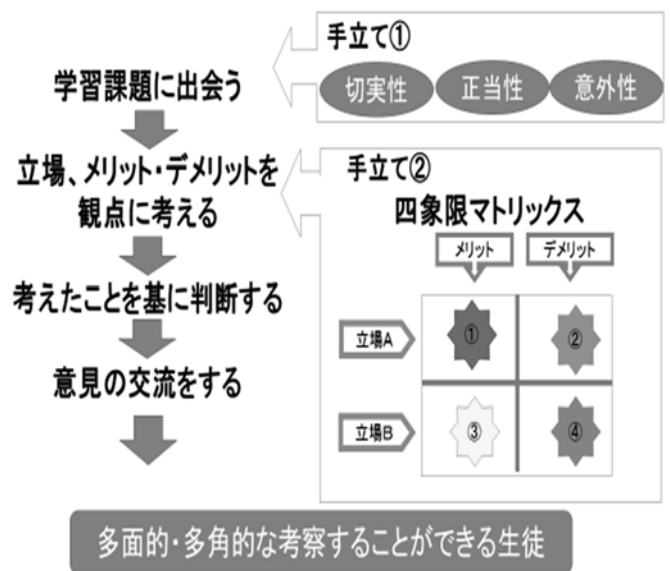
また、「メリット・デメリット」という視点をもつことは、社会的事象を少なくとも二つの面から捉えることとなり、多面的な見方となる。現代社会にあふれる情報には、メリットばかりを強調し、デメリットに目を向けさせないような事柄が多くある。そうではなくて、どんな物事においてもメリット・デメリットを明確にしようとする姿勢が多面的な思考に必要である。

これらのことから、社会的事象の捉え方を、二つの立場とそれぞれのメリット・デメリットに分類し、4象限のマトリックス(以下4象限マトリックス)に表すことを考えた。(図③)そして4つの象限全ての考え方ができるように資料の提示の工夫をした。



【図③】4象限マトリックス

具体的には、二つの対立する立場の、人々の様子が分かる資料を提示すること、それぞれの立場のメリット・デメリットについて読み取ることのできる二つの立場の主張を資料として提示することの二点に留意して実践を行った。以上のことを構想図としてまとめた。(図④)



【図④】構想図

4 検証の方法

手だて(1)(2)の効果をはっきりさせるために、価値判断場面では生徒に自分の立場を選択させ、その理由を記述させる。生徒の記述した理由に含まれる内容項目を4象限マトリックスに分類する。(図⑤)

例 学習課題：原子力発電に賛成か、反対か
 立場：反対
 理由：原子力発電は少ない原料で大量に発電ができる①が、事故が起こると被害が大きい②、電気料金が高くなって④も、安全な③燃料を推進していくべきだと思う。

		メリット	デメリット
立場 A	①		②
立場 B	③		④

【図⑤】内容項目の4象限マトリックスへの分類

さらに、生徒がいくつの象限にわたって記述することができたかを集計し、その変化を見ることで生徒の多面的・多角的な思考力の高まりを検証する。

また、以下の三人の生徒を抽出生徒と定め、ワークシートの記述や授業の様子の変化を考察する。

抽出生徒A 学力が高位。
 授業中は、一問一答式の知識を問う質問に対しては答えるが、自分の考えなど答えが決まっていない質問になると積極的に発言はしない。

抽出生徒B 学力が中位。
 自分の考えなど答えの決まっていない質問に対して、ワークシートに自分の考えを記述しようとせず、黒板に板書されたことを写すことが多い。

抽出生徒C 学力が低位。
 学習意欲が低く、授業中はあまり積極的に参加しようとしなない。

IV 実践の内容と考察

1 教師力向上実習 I における実践

(1) 実践の計画

対象：名古屋市立A中学校 第2学年 88名
 授業実践期間：5月19日(月)～6月13日(金)
 実践単元：地理的分野「第3章 世界の諸地域」

・指導計画と評価計画（5時間完了）

(関：関心・意欲・態度 思：思考・判断・表現 技：技能 知：知識理解)

学習内容	時	観	評価規準
○ 南アメリカを眺めて ・南アメリカの国々の歴史 ○ 自然環境の特色 ・多様で混ざり合う民衆	1	関	・南アメリカ州の地製図から主な自然地名や国々の位置名称などを読み取ろうとしている。
○ 熱帯地域の開発と農業 ・南アメリカの農業 ○ アマゾン河流域の開発と環境 ・セラードの開発	1	技	・写真資料やグラフなどから南アメリカ州の歴史と農業の関係や開発による環境の変化について読み取ることができている。
○ 開発と進む都市化 ・都市に集まる人々 ○ ペルーの自然と人工 ・ペルーの社会のしくみ ・自立への取り組み	1	知	・都市人口の割合、スラム人口を示す資料から、都市化とその問題点を理解している。
○ 南アメリカの経済開発と社会 ・工業化と経済開発と社会 ・結びつく南アメリカ諸国	1	思	・写真資料から多文化社会の様子とその歴史的背景について考えている。

○ 学習のまとめと表現	I 実践 I	思	・開発によって救われる人々と、それにより損なわれていく熱帯雨林の減少などについて知り、環境保全と開発どちらを優先すべきか考えている。
-------------	--------	---	--

実践 I ブラジルの開発と環境保全（検証授業）

〈授業の流れ〉

- 1961年と2008年の同じ場所の熱帯雨林の様子を写真資料で示し、熱帯雨林の減少を捉えさせる。
- 熱帯雨林が減少することによる問題について考えさせる。
- リオ会議、京都議定書などを提示し、世界的に環境保全を重視していることを説明する。その後、ブラジルで改正された「森林法」の改正前の条項を提示し、改正後はどうなったか考えさせる。
- 「なぜブラジル政府が開発を重視するか」と発問し、人口増加の問題と貧困層の増加の資料、失業率と大豆畑の増加のグラフ、ブラジルの発電構成を示す資料などを提示し、理由を捉えさせる。
- 「環境保全を優先すべきか開発を優先すべきか」と発問し、自分の意見を書かせる。（**価値判断場面**）

手立て① 価値判断を求める学習課題の提示

学習課題「ブラジルは『環境保全』を優先すべきか、『開発』を優先すべきか」

ポイント①：解決すべき切実性のある課題であること
 南アメリカの開発と環境の分野で、「開発」と「環境」の対立に目を向けた。これは、福島事故以来注目を集めている原子力発電の問題と類似している部分があり、生徒にとって関心を高められると考えた。また、ブラジルワールドカップが開催される時期でもあり、ワールドカップ開催直前にも関わらず反対のデモが起こるなどのニュースがあった。このことも、「環境保全」と「開発」との間で揺れ動いているブラジルに対する関心を高めやすいと考えた。

ポイント②：どちらの考えも正当性があること

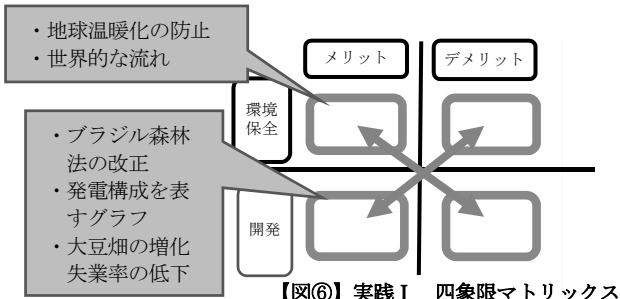
「環境保全」は地球温暖化などの問題の進行を止めるために必要なこととして、「開発」は、人口が増加し、失業率や貧困の格差が問題となっているブラジルが国民の生活を支えるために必要なこととして、それぞれの正当性を示した。

ポイント③：意外性、新たな事実の発見があること

事前の聞き取り調査においては、「環境保全、開発どちらが大切だと思いますか」という問いに対して大半の生徒が「環境保全が大切」だと答え、「開発」が必要なことであるという意識が低かった。そこで「開発」側の意見が分かる資料を提示することで、今まで知らなかった新たな事実を発見させ、葛藤させようとした。

手立て② 立場、メリット・デメリットを意識させる資料の提示

今回の実践では、前述したように「環境保全」側のメリットについて資料などを特に用意せず、口頭による確認を行った。「開発」側のメリットを読み取らせる資料として、「ブラジルの森林法の改正」、「大豆畑の増加と失業率の低下を表すグラフ」、「ブラジルの発電の構成を示すグラフ」を示し、森林伐採により畑を作ったり、ダムを造ったりして失業率の低下を図っていることを読み取らせようとした。また、「土地所有者と貧困の関係を表すグラフ」を提示し、森林伐採が貧富の格差の解消のための主な政策となっていることを示した。これらの資料の提示の仕方の工夫により、どちらのメリットも理解し、さらにその裏側にあるデメリットについても考えさせることを狙った。(図⑥)



【図⑥】実践I 四象限マトリックス

(2) 実践の実際
 <授業の様子>

②の熱帯雨林が減少することによる問題点を考える場面では、「アマゾンにしかない生物が絶滅してしまう」「南極の氷が融ける」「ツバルなどの国が水没してしまう」「異常気象が起こる」「砂漠化が進んでしまう」など多くの意見が出た。地球温暖化などの問題に対して関心が高い様子が見られた。

③の森林法がどのように改正されたか予想させた場面では、予想と反して規制を緩める改正であることに驚いている様子だった。

⑤の自分の意見を書く場面では、抽出生徒Cはなかなか自分の立場を選択することができず、葛藤している様子だった。「どちらも大切だから…」や、「どちらも選べない、難しい」などのつぶやきをする生徒も多数いた。

また、普段は学習意欲の低い抽出生徒Bも「〇〇はどっちにした？俺は環境保全。だって…」など、進んで他の生徒と意見を交流する様子も見られた。

(3) 実践の考察

<検証授業におけるその立場を選んだ理由の記述の内容項目についての分析>

最初の聞き取り調査ではほとんどの生徒が「環境保全」であったのに対し、授業を経て自分の意見をもつ

た生徒の記述では、「環境保全」が45人、「開発」が35人、両方が2人という結果になった。

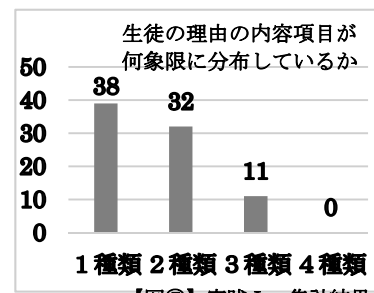
【抽出生徒が選んだ立場とその理由】

抽出生徒A 立場：環境保全
 森林伐採を続ければ二酸化炭素が増え続け地球温暖化の原因となり、酸素の量も減る一方です。そうなれば格差の対策をしていれる状態ではなくなります。あと、動物の棲む場所も消えてしまいます。このような環境問題を防ぐためには環境保全を優先した方がいいと思ったからです。(①③④)

抽出生徒B 立場：開発
 環境保全を優先してしまうと人の住むところも少なくなり、働く場所も減る。生活に困る。だけど開発を優先すれば、家や働く場所も増えて生活が困らない。反対の環境保全も大切だけどやっぱり人の働く場所や食糧土地などが減ってしまうのはいけないと思います。(②③)

抽出生徒C 立場：環境保全
 職がなく、死んでいっても地球に影響がないから、地球が終われば人類が終わる。人が死んでも地球に害はない。未来に繋げてゆく事が大事だと思う。(②④)

	メリット	デメリット
環境保全	①	②
開発	③	④



【図⑦】実践I 集計結果

左の図(図⑦)は、記述の内容項目を分類し、記述がいくつの象限にわたる理由を記述できたかを調べた結果である。内容項目が一つだけの象限に分類されてしまう生徒が4割ほどで、38人と最も多かった。記述の内容項目が4象限全てに分布する生徒はいなかった。

<成果と課題>

- 価値判断場面の設定により、2つの選択肢から選ばせたことで、考える視点が明確となり、抽出生徒Bのような自分の考えをあまり表出しない生徒も、自分の考えを記述することができた。
- 価値判断場面を設定することで、意見の対立が生まれ、抽出生徒Cのように学習意欲が低かった生徒も、自分の意見を他の生徒と交流する様子が見られた。
- 開発側のメリットを強調する資料の提示をしたことで、授業の初めは環境保全を選択していた生徒も自分の考えを再構築することができた。
- 記述の内容項目が一つもしくは二つの象限に限定されてしまう生徒が多かった。多面的・多角的思考とは言えないと考える。
- 環境保全側を選んだ生徒の多くは、開発側の主張

する失業率や貧富の格差についてどうするべきかを考えられず、貧困層の人々の立場に立って考えることができていなかった。

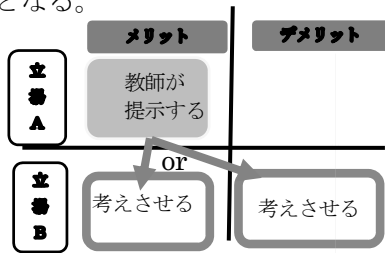
- 環境保全側のメリットが開発側にとってはどうかを考えられず、同じ社会的事象でも立場によって捉え方が変わるということに気付いている生徒が少なかった。

(4) 実習Ⅱに向けての改善点

これらの課題を踏まえ、実習Ⅱに向けて以下の段階を踏むことを考えた。

ア 指定された一つの立場に立って、メリットかデメリットかを考える思考

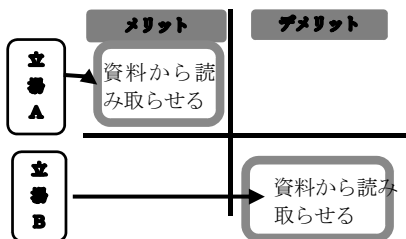
最初に立場Aにとってのメリットを教師が提示した上で、生徒を立場Bの立場に立たせる。それから、立場Aのメリットが、立場Bにとってはメリットかデメリットかを考えさせる段階を設定する。この際、立場Aのメリットが立場Bの人々にとってどうであったかを判断させる材料として、立場Bの人々の様子を表す資料を提示する。指定された立場に立って、メリットかデメリットかを考えることで、図⑧に示した矢印のような思考の流れとなる。



【図⑧】手立て②ア 4象限マトリックス

イ 社会的事象に対する二つの立場からの思考

次の段階として、二つの立場を設定し、社会的事象を違う立場から捉えることを行う。立場Aのメリットとなる事柄と、立場Bのデメリットとなる事柄を資料から読み取らせたり、考えさせたりする。ここで示す資料は、立場A・Bの人たちの様子が分かる資料である。その様子から、社会的事象が立場にとってメリットになるかデメリットになるかという判断をする。この段階では立場から考えさせるため、図⑨に示したような矢印の思考の流れとなる。



【図⑨】手立て②イ 四象限マトリックス

2 教師力向上実習Ⅱにおける実践

(1) 実践の計画

対象：名古屋市立S中学校 第2学年 88名

授業実践期間：9月22日(月)～10月13日(金)

実践単元：歴史的分野「第4章 近世の日本と世界」

「第5章 近代世界の確立とアジア」

・指導計画と評価規準(7時間完了)

(関：関心・意欲・態度 思：思考・判断・表現 技：技能 知：知識理解)

学習内容	時数・手立て	観点	評価規準
4 近世の日本と世界 (4) 経済の成長と幕政の改革 ・享保の改革	1 実践 Ⅱ(1) ア	思	享保の改革の諸政策の内容を町人や農民の立場に立って考えている。
(5) 繰り返される幕政改革 ・田沼・寛政の改革 ・天保の改革	1	知	繰り返し行われる幕政改革の内容とその背景にある社会情勢の変化について理解している。
1 近代世界の確立とアジア (1) 王は君臨すれども統治せず ・絶対王政の成立 ・イギリス革命 ・フランス絶対王政	1	関 知	国王と議会の関係の変化から、市民革命が起きた原因を追究しようとしている 17世紀のフランスで絶対王政が成立し、国王による専制政治が行われたことを理解している。
(2) 代表なくして課税なし ・アメリカ合衆国の成立 ・フランス革命	1	思	フランス革命の過程を調べ、その後のヨーロッパ諸国に自由と平等という人権意識を広める革命であったことをつかんでいる。
(3) 世界の工場の光と影 ・イギリス産業革命 ・産業革命の広がり ・資本主義社会と社会主義	1 実践 Ⅱ(2) イ	思	産業革命が生産の能率を高め資本主義を発達させた一方で、労働問題などの社会問題が発生したことを捉えている。
(4) 強大な国家を目指して ・アメリカ合衆国の発展	1 実践 Ⅱ(3) 価値判断場面	思	アメリカ合衆国において奴隷制度の対立から奴隷の立場にたつて北側と南側の主張を考え、評価している。
(5) 近代化と列強の成立 ・ロシア帝国の改革 ・イタリアとドイツの統一	1	知	近代化に成功したヨーロッパの各国が列強として影響力を強めていったことを理解している。

実践Ⅱ(1) 享保の改革 (第1時)

〈授業の流れ〉

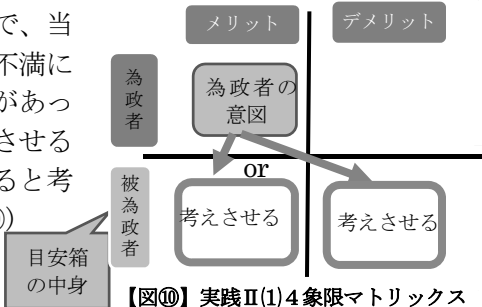
- ① 享保の改革の為政者側の意図をまとめさせる。
- ② 目安箱の中身を紹介し、その中から民衆の不满にはどんなものがあつたか考えさせる。
- ③ 享保の改革の諸政策を、民衆の立場に立って○△×で評価し、その理由を記述させる。
- ④ 評価と理由について発表する。

手立て② 立場、メリット・デメリットを考えさせる
資料の提示

ア 指定された一つの立場に立って、メリットかデメリットかを考える思考

一つの立場の指定を享保期の民衆とした。享保期

は幕府の財政が悪化したために様々な政策が行われており、民衆にとってメリットとして捉えることができる政策もデメリットとして捉えることができる政策も存在する。また、目安箱の中身を教材として用いることで、当時の民衆の不満にどんなものがあったかを考えさせることができる考えた。(図⑩)



【図⑩】実践Ⅱ(1)4象限マトリックス

実践Ⅱ(2) 産業革命 (第5時)

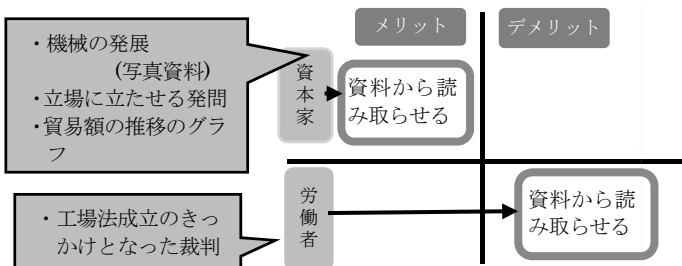
〈授業の流れ〉

- ① 産業革命によって機械化が進み、生産効率が上がっていったことを写真資料から捉える。
- ② 「機械化によって良かったことは何か」や「工場主の立場に立って、どんな人を雇うか」と問い工場主の立場に立たせて考えさせる。
- ③ 資本主義の経済の仕組みについてまとめる。
- ④ 産業革命前後の輸出量を示すグラフから、産業革命によって、生産力が上がり、世界に輸出していったことを読み取らせる。
- ⑤ 工場法が成立するきっかけとなった裁判での答弁を、労働者の実態と、労働者の立場にとっての産業革命とはどんなものだったかを考えさせる資料として提示する。
- ⑥ これらの資料を基に、「産業革命は資本家と労働者の立場にどのような影響を与えたか説明しよう」と発問し、それぞれの影響について記述させる。

手立て② 立場、メリット・デメリットを意識させる資料の提示

イ 社会的事象に対する二つの立場からの思考

「立場の違い」を意識させる教材として、産業革命を取り上げた。産業革命は、「資本家にとっては」生産力が上がり利潤も増えたというメリットの面と「労働者にとっては」過酷な労働条件になったデメリットの面が捉えやすい教材であると考えた。(図⑪)



【図⑪】実践Ⅱ(2) 4象限マトリックス

実践Ⅱ(3) アメリカ南北戦争 (第6時 検証授業)

〈授業の流れ〉

- ① 南北戦争を描いた絵の資料を見せ、興味を持たせる。
- ② 南側ではプランテーション農業が盛んに行われ、奴隷を労働力として用いたこと、北側では工業が発展し、労働力が不足したことをワークシートにまとめさせる。
- ③ 奴隷制度について北側と南側の立場の主張を提示し、北側と南側が奴隷身分に対してそれぞれ何を保証しているのかキーワードをまとめさせる。
- ④ 当時の奴隷身分の人々の暮らしを示す資料を提示し、その資料の中からそれぞれの立場の根拠となる部分に線を引かせる。
- ⑤ 「もし自分が奴隷なら、北側・南側どちらに住みたいか」と発問し、自分の意見を書かせる。
- ⑥ 近くの人と意見の交流をさせる。
- ⑦ 全体で意見の交流をし、両方の立場の意見について考えさせる。
- ⑧ 交流した後で、もう一度自分の意見を記述する。

手立て① 価値判断を求める学習課題の提示

学習課題「あなたが奴隷なら、北側・南側どちらに住みたいか」

ポイント①：解決すべき切実性のある課題であること

実習Ⅱは、歴史的分野での実践であり、地理的分野よりも現在とのつながりが意識しにくく、直接自分たちに関わりのある社会的論争問題のような課題を取り上げることは難しかった。しかし、アメリカ南北戦争は地理的分野で学んだ人種差別と深く関連している。最近も、白人警官が黒人を殺害する事件が起こっており、今なお未解決な黒人差別問題について切実性のある課題であると考えた。

ポイント②：どちらの考えも正当性があること

北側は「自由」を保証し、南側は「衣食住」を保証したという、それぞれの立場の正当性を示した。

ポイント③ 意外性、新たな事実の発見があること

これまであまり取り上げられなかった奴隷制度における南側の主張を示す資料を提示した。当時の奴隷の待遇が、それほどひどいものではなかったという考え方を示す資料を扱ったことと、北側の奴隷解放の意図に労働力の確保や、南北戦争に対する意欲付けなどの戦略的な側面もあったことを取り上げたことで、今まで知らなかった事実を発見させ、葛藤させることを狙った。

手立て② 立場、メリット・デメリットを意識させる資料の提示

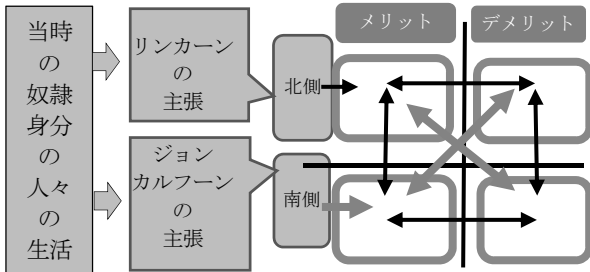
実践Ⅱ(3)の価値判断場面においては、北側と南側の

主張をそれぞれ提示した。主張の中から読み取れるそれぞれの立場のメリットを生徒に考えさせた。

奴隷制度に対して賛成か、反対かという問題になると、倫理的に奴隷制度は反対であるというのが「正しい意見」になってしまう。そこで、北側の奴隷解放への動きには労働力の確保や南側の勢力に対する戦略的な側面もあったことを説明した。また、北側の主張の中にも、白人が黒人よりも優位であると考えていることを示す資料や、南側の主張の中に、北側よりも南側の労働条件が良く、リスクが少ないことを主張している資料があることを示した。これらの資料の提示により、奴隷の立場の人々にとって南側に住むメリットがあるのではないかと考えることができるようにした。

(図⑫)

これらの活動の後、価値判断場面において立場を選択させ、自分の意見を書かせた。



【図⑫】実践Ⅱ(3) 4象限マトリックス

(2) 実践の実際

〈各授業の様子〉

実践Ⅱ(1) 享保の改革 手立て②ア

③の評価する場面では、普段はなかなか考えることのできない被為政者の立場から考えさせた。新田開発では、為政者側にはメリットでも、被為政者にとってはデメリットであると評価し「幕府にとっては収入が増えるので○だが、民衆にとって負担が増えるので良くない」と記述した生徒もいた。

④の発表する場面では、違う評価をした生徒同士の意見の交流が見られた。例えば、新田開発に対して○を選択した生徒は「耕す土地が増えれば収入が増えるからよかった」という意見を発表した。×を選択した生徒は「ただでさえ大変なのに新たにやらなきゃいけないことが増え、負担が増えるから×にしました」と意見を発表していた。自分と反対の評価の意見を聞いて「ああ、なるほどね」など、納得している様子も見られた。

また、授業の感想の記述では「民衆の立場で評価すると、なんでこういうことをしたかっていう意図がわかってくるので楽しかったです」や「資料を比べて評価するという授業はなかなかないので新鮮で楽しかったです」などの記述をする生徒もいた。

実践Ⅱ(2) 産業革命 手立て②イ

②の工場主の立場に立って考えさせる場面では「どんな人を雇いますか」という質問に対して、「能力が高い人」「言うことをよく聞く人」「素早く動ける人」「文句を言わない人」など、多様な意見が出された。

⑤の労働者の実態を示す資料から考えさせる場面では、多くの生徒に、産業革命によって労働者はつらい生活を強いられたことを捉えている記述があった。

⑥のそれぞれへの影響を記述する場面では、同じ社会的事象についても、立場が違えば受ける影響も変わること捉えている生徒が多かった。

また、生徒の中にはそれぞれの立場の中でも、良い影響と悪い影響について考えることができている生徒もいた。例えば、「資本家は生産力が上がり利益も増えたけど、競争に負けたら労働者になってしまうリスクもあった」などの記述や「労働者は、大変な重労働を課せられたが、前よりは働き口が増えた」などの記述である。

実践Ⅱ(3) アメリカ南北戦争 (検証授業)

③のそれぞれの主張から考える場面では、北側に比べ、南側の主張について考えることが難しい様子だった。そこで資料の「北側よりもいい暮らし」という言葉に注目させ、「北側よりもいい暮らしとは、具体的にどういうことだろう」と質問することで、「老年になっても衣食住を保証している」というメリットを捉えさせた。

⑤の自分の意見を書く価値判断場面では、④で奴隷の様子を示す資料に線を引いたことを根拠として、自分の意見を記述している姿が見られた。

⑥の近くの人と意見の交流をする場面では、自分の意見に対して自信のある生徒が多く、「南側で奴隷として生きたいの？殺されるかもしれないだよ」「でも悪いことしなければ、おじいちゃんとかになっても面倒見てくれるんだよ、北側だと働けなくなったらおしまいじゃん」など、相手を納得させようと意見を交流する様子が見られた。

⑧の交流した後でもう一度自分の意見を記述する場面では、反対の立場の意見を聞き、もう一度自分の考えを再構築する姿が見られた。「～という意見を聞いて、南側もいいと思った」や、「でもやっぱり～なので北側の方がいいと思った。」などの記述が多く見られた。

(3) 実践の考察

〈検証授業におけるその立場を選んだ理由の記述の内容項目についての分析〉

「北側」「南側」の二つの立場について、それぞれメリット・デメリットに関する規準を設定し、4象限に

分けた。そして、生徒の記述がそれぞれの象限に当たるか分類し、集計した。

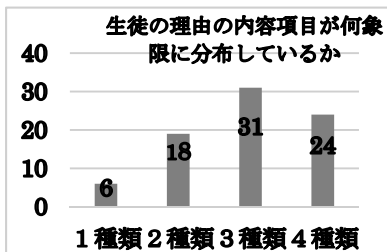
【抽出生徒が選んだ立場とその理由】

抽出生徒A 立場：北側
奴隷というのは残酷なもので、自由を奪われたり、監視されていて逃げられない④のでカルフーンの言った「良い生活」③というのは実現されないと思うので自由を与えてくれる①北がいいと思ったから。
 北側：少し反抗しただけで傷を負わされる④のは良くないという意見で、やはり自由がない④のは厳しいと思うなあと考えました。南側：面倒を見てくれる③のと紛争が避けられる③という意見で生きていける③ことを考えると南側の方が… (①③④)

抽出生徒B 立場：北側
「自由」が保障される①し、白人黒人が平等な感じがする①。南は自由が与えられない④から南には住みたくない。暴力などが避けられる④。
 南側の意見を聞いて、衣食住が保障される③のはいいと思うけど監督者のいうことを聞かないと罰を受ける④ことがあるので嫌だなと思う。 (①③④)

抽出生徒C 立場：北側
 南側は食料や着る物、それに医療を与えられる③。貯金やギャンブルができる③。でも自由がある①ので北側に住みたい。逆に南側は自由が一切なく④暴力は当たり前④。時には殺すこともする④ので住みたくない。 (①③④)

	メリット	デメリット
北側	①	②
南側	③	④



左図(図⑬)は記述の内容項目を分類し、一人がいくつの象限にわたる理由を記述できたかを調べた結果である。

内容項目が3つの象限に分類される生徒が一番

多く31人という結果になった。また、記述の内容項目が4象限全てに分布している生徒は24人という結果になった。

〈成果と課題〉

- 手立て②ア・イの段階を経ることで、同じ社会的事象でも立場により捉え方が変わることに関心、2象限以上にわたる記述ができる生徒が増えた。
- 奴隷の生活の様子を示す資料を提示したことで、それを根拠に自分の意見を書くようになり、理由の記述の根拠が明確になった。
- 友達と自分の意見を進んで交流し、相手を納得させようと関わる姿が見られた。
- 理由を交流することで、反対の立場の考え方を知り、自分の意見を再構築する姿が見られた。
- 理由の内容項目が一種類の象限にしか当てはまら

ない生徒や、理由を記述することができなかった生徒が数人いる。

- 資料を多く取り扱ったことで、一つ一つの資料について十分に考えさせる時間が取れなかった。

V 研究のまとめ

1 実践の成果

本実践を通しての成果を、手立て①②に即してまとめる。

(1) 手立て① 価値判断を求める学習課題の提示

地理的分野や歴史的分野において、以下のポイントを意識した価値判断場面を求める学習課題を提示し、実践した。

- ポイント① 解決すべき切実性のある課題であること
- ポイント② どちらの考えも正当性があること
- ポイント③ 意外性、新たな事実の発見があること

このことによって、見られるようになった生徒の姿を、3点にまとめる。

1点目は、価値判断場面自分が支持する立場を選択することを迫られるため、生徒一人一人が自分の考えを持ち、考えようとする姿である。

2点目は、意見の交流をする中で、反対の立場の生徒を納得させようとする気持ちが芽生え、より具体的な根拠を基にして意見を構築しようとする姿である。記述例を挙げた生徒のように、資料にある言葉を引用などし、根拠としている生徒が多かった。

3点目は、反対の立場の意見を聞き、自分の考えを再構築し、考えを変えた生徒や、自分の立場は変えないにしろ、相手の立場の意見の納得できる部分を見付けることができた生徒の姿である。

ここに挙げたような、価値判断場面葛藤したり、意見の交流を通して両方の立場について深く考えたりする姿から、生徒は多面的・多角的に考察することができるようになったと考える。

(2) 手立て② 立場、メリット・デメリットを意識させる資料の提示

二つの対立する立場の、人々の様子が分かる資料を提示して、社会的事象を、二つの立場とそれぞれのメリット・デメリットを意識させて考えさせた。

このことによって得られた成果について、実践Iと実践II(3)の比較から述べる。図⑦と図⑬を比較すると、実践II(3)の方が記述の内容項目が多く象限に分布している生徒が多い。特に記述の内容項目が4象限全てにある生徒が、0人から24人に増えたことが成果として挙げられる。さらに、個々の生徒の変化に着目した。以下の表①では、実践Iから実践II(3)への変化を示している。縦軸

を実践 I での記述の内容項目が分布する象限数を示した。また、横軸はそれぞれの生徒が実践 I の時の象限数から実践 II (3) でどれだけ増減したか示している。

記述の内容項目が分布する象限数の増減

		実践 II (3)					
		-		0	+		
		-2	-1	0	1	2	3
実践 I	0			5		2	
	1		3	4	12	12	7
	2	1	1	3	14	13	
	3	1	1	5	4		
計			7 人	17	64 人		

【表①】記述の内容項目が分布する象限数の増減

表①から、実践 I と比べ実践 II (3) では、記述の内容項目が分布する象限数が増えた生徒が64人いることが分かる。象限数が減った生徒も7人いるが、記述の量が格段に増えている生徒もあり、そのような生徒は時間内に多くの象限について記述ができなかった可能性がある。そこで記述の内容項目が4象限にどれだけの個数、分類されるかを集計した。

奴隷である限りいつ殺されてもおかしくない^④し、主人である人間がいい人とは、限らない^④。それに**必用最低限しか与えられない^④**から、野性的な行動をしやすく^④、殺されやすい^④から。奴隷たちの睡眠等の生理的欲求が満たされていたとは考えにく^④、犯罪等の野性的な行動に出やすく^④、警邏隊に殺されることが多かった^②と推測される。ゆえに私は北側に住みたい。奴隷等の生理的欲求が満たされていない^④と思う根拠は、**警邏隊がいた^④**こと。もし本当に十分な生活ができているなら**必要ないから**

例えばこの生徒の記述だと、①に当てはまる内容項目が0、②が0、③が0、④が10個であり、合計10個として集計した。この数値が多くなるほど、具体的な根拠を基に自分の意見を書くことができていることとなり、思考の深まりを示すことができる。以下の表②は、その集計した結果を表に示したものである。縦軸は、実践 I の時の記述の内容項目の個数であり、横軸は実践 II (3) で実践からの増減を示したものである。

なお、上記の生徒は、実践 I では4個の内容項目があったため、+6として集計した。

記述された内容項目の個数

		実践 II (3)												
		-		0	+									
		-2	-1	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	
実践 I	0			5			2							
	1		3	4	1	8	7	3	2		2	2		
	2	1	1	3	4	2	6	3		4	3		1	
	3			2	2	2	1	1	2		1	2	1	
	4						1	1		1		2		
計			5人	14人	69 人									

【表②】記述された内容項目の個数の増減

表②から、記述された内容項目の個数について増えている生徒が多いことが分かる。記述の内容項目が分

布する象限数が増えたことと、根拠として書かれる内容項目の個数が増えたことから、生徒の多面的・多角的に考察する力がより高められたと考える。

2 実践の課題

- (1) 価値判断場面の設定を含む単元構想について
実践 II (3) ではアメリカ南北戦争について一時間かけて取り扱った。しかし、教科書では次時に取り扱った「ロシア帝国の改革、イタリア・ドイツの統一」の内容と合わせて一時間として構想されており、価値判断場面を設定したことにより、単元の時数が増えてしまったことが、課題として挙げられる。教材研究をより深め、知識を習得させることに重点を置く学習活動、考えさせたり知識を活用させたりすることに重点を置く学習活動など単元の中でのバランスを考える必要がある。

(2) 資料の提示・選択の工夫

提示する資料が多く、それらの資料を分析したり、じっくり考えたりする時間の確保が不十分であったこと課題として挙げられる。できるだけ説明の時間を減らし、生徒自身に考えさせる時間を確保することが、今後必要である。

VI おわりに

本実践では、資料を基に生徒個人で考えさせる時間が多かった。しかし実践の中で、生徒同士の交流によって生徒の考えが引き出されたり、深まったりする姿が多く見られた。そこで今後は、生徒同士のより効果的な交流のさせ方について研究を深めていきたい。

一付記一

教職大学院2年間を通して「学校サポーター活動」「教師力向上実習 I・II・III」「特別課題実習」「多様なフィールド実習」において、多くの学校及び職場で、様々な活動や実習をさせていただきました。ご多忙の中、多くのご指導・ご助言をいただき、お世話になった先生方や、連携協力校で学びの場を与えてくださった先生方に心から感謝申し上げます。この二年間で学んだことを糧に、今後も努力していく所存です。本当にありがとうございました。

参考文献

- ・「第2期教育振興基本計画の策定について(諮問)」中央教育審議会 (2013)
- ・「歴史的事象を多面的・多角的に考察する生徒を育てる社会科学学習指導」山川征治 (2004)
- ・「社会科学学習原理の探求」小原友行 (1990)
- ・「『思考力・判断力・表現力』をつける社会科授業デザイン」小原友行 (2009)
- ・「中学校学習指導要領解説 社会編」文部科学省 (2008)